SPECIAL

特集 さまざまな課題に対応するために

中学校入門期における文字指導

吉田晴世（大阪教育大学）

はじめに

言語習得は，母語習得であれ，第二言語・外国語習得であれ，「聞く」ことから始まる。小学校学習指導要領（外国語活動）には，「外国語の音声やリズムなどに慣れ親むとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと」とあり，これは音声を基軸とする指導の必要性に言及したものである。文字指導もその延長線上にあり，音声を無視した文字指導は避けられなければならない。

本稿では，小学校外国語活動における文字指導の現状を述べ，そのような経験を持つ中学１年生を対象とした，音声に基づく文字指導を提案したい。

小学校での文字指導

小学校で「話すこと」「聞くこと」を重点的に学んだ子どもたちが中学校に入学したとき，文字を介した学習をしていない状態での中学校の英語の４技能を習得することの難しさについて，しばしば指摘される。音声指導のみでは，結果としては，中学校ではもう一度文字を介しながら「話したり，聞いたり」することを指導しなければならない。これでは，子どもにとって負担でもあり，指導する教員側の負担にもなることが想定される。

確かに，子どもの言語習得の観点からも，音声を主に扱った内容の指導が小学校の段階から行われることの意義は明確である。しかし，高学年の子どもたちは，特に６年生にもなると，「文字」への関心や興味を示すようになる。低学年の子どもは，無意識に先生が言う通りに発音するため，正しい音を身につけさせることが大切である。しかし，高学年の子どもは，音声の指導だけでは十分でない。高学年は抽象概念への理解を示すようになり，文字を使用した言語活動にむしろ興味を示すようになる。したがって，児童に語彙を導入する際には，語彙を提示する絵の下に文字を提示することで，児童は，音声の補助として，文字を効果的に認識できるようになる。

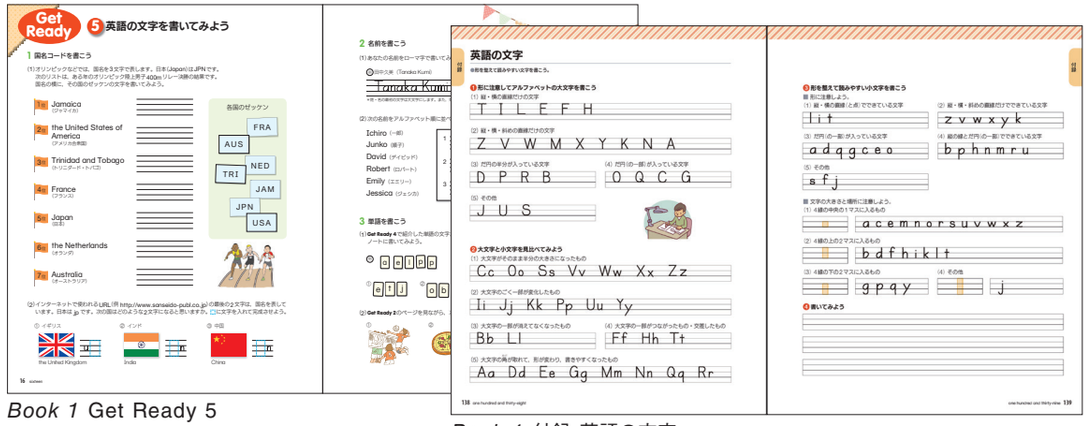
小学校段階では，上述のように絵と文字を同時提示することに加え，歌・チャンツ・ゲーム等の活動を通じて音と文字に慣れ親しんでいる。書く指導を導入している小学校もあるが，ペンマンシップ等の練習帳を用いての指導はとても稀で，ストロークの規則性などは教わっておらず，文字をなぞったり，書き写したりするという段階でとどまっているのが現状であろう。

中学校での文字指導

ここでは，*28NC* を活用した，中学校入門期における「文字の書き方」のについて提案したい。

（1）大文字・小文字の指導

Book 1 Get Ready 5の１では，オリンピックという多くの生徒が興味を持ち，身近に感じる題材を扱っている。競技選手のゼッケンでは，国名を３文字で示すことに気づかせ，スペルアウトされている国名と，それを表す大文字３文字をマッチングさせ，四線上に大文字を書かせるタスクを課している。続く設問では，インターネットで使用されるURLアドレスの最後の２文字（.xx）は，国名を表していることを明示することで，「文字（ローマ字）への興味」を持たせるよう仕組まれている。ここでは小文字を書きながら，大文字とは異なるとことに気づかせ，四線上の位置や大きさも違ってくることも確認させることができる。書かせる際には，



Book 1 Get Ready 5

Book 1 付録 英語の文字

「j,a,m,a,i,c,a（1文字ずつ名前読み），Jamaica [dʒəméikə]，J,A,M（1文字ずつ名前読み）」というように発音してから書くことで，アルファベットの音と文字との結びつきを強化する。他の国については，「世界の国名・地域名および国旗・域旗と各種略号」を示すウェブ・サイト（http://www.geocities.jp/chr_cyobi/country-code.html）を利用すれば，練習量を増やすことが可能となる。

（2）単語を書く指導

Book 1 Get Ready 5の３では，生涯を通じて最も書く機会の多い，自分の名前を書く練習に入る。注意点としては，氏名の初めの文字はそれぞれ大文字であること，四線上での文字の位置，文字間隔，日本名の場合は訓令式（Itiro）ではなくヘボン式（Ichiro）となることである。また，英語名は日本語に無い発音があり，それに伴い綴りも異なることを説明する必要がある。ここでも，１文字ずつ「アルファベットの名前読み」をしながら書く練習をするとよい。

次に，単語を書く練習に入るが，小学校で慣れ親しんできた「アルファベット・フォニックス・ジングル」を用いながら “apple, apple … a a a” と教えたら，appleのaの母音の「音読み」が定着し，a [æ] で始まる他の単語を追加しても，違和感なく学べる。

（3）活用したい資料（*Book* 1 付録 英語の文字）

①では，大文字の形に着眼してグループ分けされているので，P.16の大文字３文字の練習の際にあわせて提示すると効果的である。あくまでも，大文字は，四線の上から３本目より上に書くことを強調したい。②では，各文字の，大文字と小文字で比較をしており，（1）から（5）と次第に類似性が無くなってきていることに気づかせる。英語は文字数が限られており，大文字26個と小文字26個の52文字だけを使って単語を作っているので，大文字と小文字の区別や綴りがとても重要な役割を果たすことを明確に説明しておきたい。③では，小文字に焦点をあてているが，特に「文字の大きさと場所」については，グループ別に押さえておきたい。中でも，四線の上から３本目の下までくる “g, p, q, y, j” の５文字は，大文字やその他の小文字にはないパターンであるが，学年が上がり，さらには高校・大学へ進んでも，きっちりと書けない場合が多く，３本目の下までくることさえ知らない生徒・学生もいるのが現状である。

おわりに

文字指導はとても時間がかかり，授業時間配分で悩む部分であろう。生徒にとっても，小学校の外国語活動で音を中心とした活動が大半を占めていた分，黙々と大文字・小文字・句読点などに気をつけながら，何度も書き続けることに抵抗感を覚え，英語嫌いになる場合も少なからずある。そのようなときに，音声を取り入れ，フォニックス・ジングル等を活用して，リズミカルに文字指導を行うことで，音と文字の結びつきを体得しながら書くことへの楽しみを促すことが可能となるのではないだろうか。